

五輪聖火ルート公表 北奥羽住民

「一生に一度」膨らむ希望

2020年の東京五輪・パラリンピックの聖火リレールートが公表された1日、聖火リレーが行われることになった北奥羽地方の住民らは「一生に一度の機会。チャンスがあればランナーに挑戦したい」「聖火が通ることによって世界に注目され、活性化につながってほ

しい」と希望を膨らませた。ルートには八戸、三沢、久慈など東日本大震災の被災地も含まれており、震災復興の情報発信に期待する声も。半世紀ぶりの一大イベントが約1年後に迫り、住民の関心も高まっている。

(取材班)



聖火ランナーのルートが決まり北奥羽地方の住民の五輪への関心も高まっている(写真はコラージュ。上から聖火リレーの青森県内のゴール地点となる八戸港館鼻岸壁と種差海岸で練習に励む八戸学院光星高陸上部の部員)

青森県南地方では、20年6月12日にもつ市を出発し、十和田市や三沢市などを通じて八戸港館鼻岸壁で青森県内のゴールを迎える。岩手県北地方では同日に久慈市や、三戸市で聖火リレーが行われる見通しだ。

「聖火が八戸に来るなんて一生に一度あるかないか。チャンスがあるなら走ってみたい」と意欲を示すのは八戸学院光星高2年で陸上部に所属する佐々木奈菜さん(16)。公募となるランナーに応募する予定だという。普段練習している八戸市の種差海岸の近くで聖火リレーが行われることを知り、1年後が待ち切れない様子だった。

青森県内のゴール地点で、聖火の到着セレモニーが行われる館鼻岸壁。「浜のスパ・漁港ストア」を営む八戸水産公社の後藤隆貴さん(61)は「岸壁は朝市などで全国的にも注目を浴びている。ゴールに選ばれたことはとても光栄なことだ。関係機関と連携しながら本番を迎えたい」と笑顔で話した。



2020年東京五輪聖火リレーのルート概要などの発表イベントで披露されたTシャツとユニホーム=1日、東京都港区

県内屈指の観光地・十和田湖周辺もルートに組み込まれた。十和田市大沢田の会社員山端夢さん(23)は「十和田が選ばれたのは市民としてとてもうれしい。聖火が通ることによって地元が世界的に注目され、少しでも活性化につながれば」と期待を込めた。

パラリンピックでカナダの車いすラグビーチームの事前合宿地になっている三沢市。市オリンピック・パラリンピック推進室の熊野真希室長は「具体的なルートは今後、検討されると思うが、貴重な機会を市民に楽しんでもらい、五輪を身近に感じてもらえるよう準備を進めたい」と話した。

2日目のスタート地点となる、むつ市に住む田名部高3年の小野紋奈さん(18)は「五輪は見てみたいと思っていたので、リレーも楽しみ」と心を躍らせた。

久慈市天神堂の松本和憲さん(70)は1964年の東京五輪で聖火リレーが地元を通った際にボランティアスタッフとして関わった。当時を懐かしみ、「人生で2度も地元で聖火リレーが見られるのは幸せ。震災からの復興が進んだ姿も発信したい」と強調した。